

では、私たちがアブラハムを肉による先祖としていることについては、何と云うべきでしょう。もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。聖書には何と云っていますか。「アブラハムは神を信じた。それが彼の義と認められた」とあります。ところで、働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされます。しかし、不敬虔な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。同じようにダビデも、行いがなくても神に義と認められた人の幸いを、こう云っています。「不法を赦され、罪を覆われた人は/幸いである。主に罪をとがめられない人は/幸いである。」(ローマ4:1~8)

パウロは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によるのであると、「信仰による義」を力説した。パウロはユダヤ教ファリサイ派の学徒として、律法を厳守することによって義に到達できると信じ、ひたすら修行していた。そのパウロが、復活したイエス・キリストに出会い、罪の赦しを知り、死を超えた神の永遠の命を体験した時、律法は罪の自覚を生じさせるだけで、義には到達できない。ただ、信仰によってのみ、無償で義に与る恵みを知った。これが、パウロの宗教観をひっくり返す、福音の喜びであった。パウロは、イエス・キリストを信じる信仰によって与えられる「神の義」が啓示された福音の宣教に全力を注いだ。そこで、イスラエル人が最も尊敬するアブラハムとダビデの場合はどうだったのかと論を進めている。アブラハムは神の召しを受け、流浪する苦難の中で、神への一途な信仰を確立したイスラエル民族の祖と言われる人である。イスラエル人はアブラハムを「信仰の父」と呼び、彼の子孫であることを誇った。そのアブラハムの信仰は何であったか。パウロは、もし、行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前では誇ることはできないと言う。聖書には、「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」と書かれている。創世記15章5~6節に「主はアブラムを外に連れ出して言われた。『天を見上げて、星を数えることができるなら、数えてみなさい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」と、行いとは関係なく、神の言葉を信じた彼の信仰により神は彼を「義」と認められたと書いている。働く者への報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものであるが、「不敬虔な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。」不敬虔な者を義とする方を信じる人は、律法を守る正しい行いがなくとも、その信仰によって義とされる。パウロは、アブラハムにおいても「信仰による義」が与えられていたと語っている。ダビデも行いによらず、信仰によって義とされる幸いをくださる神を称えている。ダビデはイスラエルを強大な国家へと導いた王として、民衆から絶大な尊敬を集め、メシアはダビデ家から出ると言われるほどであった。ダビデは、様々な罪を犯しているが、その度に砕かれた心で悔い改め、赦しに与っている。そのダビデの詩とされている詩編32編1~2節で、「幸いな者/背きの罪を赦され、罪を覆われた人。幸いな者/主に過ちをとがめられず、その霊に欺きのない人」と歌っている。ダビデも背きを赦され、罪を覆っていただき、神から罪はないと見なされた者は幸いであると、信仰による赦しの恵みを感謝している。パウロは、イエス・キリストが遣わされる前のアブラハムもダビデも行いによるのではなく、信仰によって義とされたと注解している。